

井上靖歴史小説における女性像

趙 秀 娟*

A study of the Female Characters in Yasusi Inoue's Historical Novels

Xiujuan Zhao

Abstract: Yasusi Inoue is a most important Japanese author in the post-war literary world. He is a pioneer of historical novel field, exercised a profound influence over the modern Japanese literature. The female characters in his novels are characteristic and charming. Here we'll approach the cernel of their characteristics through the analysis of 2 tripical works of Yasusi Inoue's historical novels:the Dairy of Yodo ;the Legand of Yokihi.

一

井上靖氏の歴史小説においては歴史上の女性を主人公にするのは数少ないが、いずれも質高く、名作である。中で、1961年度野間文芸賞を受賞した『淀どの日記』は『茶々 生涯の貴妃』という名で映画化され、昨年年末（2007）に上演され、大きな反響を呼んだ。同じく女性を主人公にした名作『楊貴妃伝』も『花舞う長安』という歌劇に改編されて、2004年に宝塚によって公演した。この二作は井上氏歴史小説の代表作で、女性の心理を描くのに成功した上、歴史に生きる女性たちを生き生きと現代に甦らせている。

文学に描かれている古代女性といえば、常に優雅繊細で、弱弱しいというイメージがある。男たちが覇を争う歴史で女性には支配され、翻弄されるしかなかった。だが、作家井上靖の歴史小説における女性像はそれと違う。氏は歴史小説において、戦乱時代を生きた女性に注目し、自分の運命を冷静に見つめ、凄まじい勢いで精一杯に生きていく女性像を築いた。以下は井上靖の歴史小説『淀どの日記』と『楊貴妃伝』を中心に、テキストを詳しく分析することによって、そこに描かれている美しい女性像に迫っていく。

二

『淀どの日記』は華麗に魅せる『女たちの戦国絵巻』で、茶々という独特な女性のスケールの大きい、波乱万丈の人生を深く美しく浮き彫りにしていく。作中の茶々は戦国武将織田信長の妹、お市の方と小谷城の城主浅井長政との間に生まれた長女。浅井は1573年、織田信長の手で攻め滅ぼされ、十歳の茶々と妹たち、そしてお市の方は織田家の重臣柴田勝家の元に身を寄せることになる。

このとき茶々はすでに自分たちの暗い運命に朦朧と意識し始めた。「お市の方が柴田勝家に再婚することは、なぜか自分たち母子の運命がここで大きく間違った方向に折れ曲が

* 教養部

ってしまうことのような気がした。理由はなかった。勝家の将来がいかなるものか全くそれを判定する材料は持っていなかったが、直感的に茶々にはそれが何か暗く冷たいものの思われた。何日か前に会った秀吉という武人にはある明るい安定的なものを感じたが、まだ一度も見たことのない勝家という武将には何は悲劇的なものを感じた。秀吉の印象が明るく、その秀吉と不和だということに於いて、勝家に対してその様なくらいものを茶々は想像したのかもしれないが、なにか母を勝家に縁組させることは避けたい気持ちはあった。併し、この気持ちは母にも妹たちにも説明できないものであった。」¹⁾

茶々の予感はずばりとのち中した。信長亡き後、戦国の覇者として羽柴秀吉が頭角を現していく。1583年、秀吉に攻められた柴田勝家は最後の時を迎える。その勝家と共に自害する道を選ぶお市の方は一緒に死のうとする娘たちに「あなたたちだけが、わたしの誇りなのです。生きるのです」と言い残し、息絶える。茶々は妹たちと共に、生きることを決意する。三姉妹は秀吉の囚われ人として暮らすことになった。だがその生活は長く続かず、小督は尾張の小大名、佐治与九郎のもとへと嫁ぐことが決まり、はつもまた京極高次の妻となるべく、去っていった。

一人残された茶々のところに、今は豊臣と姓を改めて関白となった秀吉の奥向きを束ねる大蔵卿の局が訪ねてくる。そして秀吉には世継ぎがなく、またその世継ぎを産めるのは、秀吉が昔から見始めていた茶々しかないと告げ、側室になるよう申し立てた。この時茶々の心理は極めて複雑である。ここでは作者は茶々の唯一の落涙の場面を描いた。「ふいに茶々は自分の眼から涙が落ちるのを感じた。自分が秀吉との間に子供をもうけるなどということ一度でも考えたことはあるであろうか。家を亡ぼし、肉親の者を自分から奪った秀吉との間に！茶々は氏郷が前に居ることも構わず、涙を落ちるままに任せていた。悲しみの涙ではなかった。不思議な運命を背負って来た自分という女性の業に思い当たったときの、言い知れぬ感情の昂ぶりであった。」

いろいろ悩んだあげく、茶々はこの話を請けることにする。やがて彼女は天下人の世継ぎを産むことに、自らの生きがいを見出していった。程なく茶々は嫡男を儲けた。一方では小督は、徳川家との絆を深めようとする秀吉の策略によって、徳川家康の跡継ぎ秀忠の元へ嫁がされることになる。そして、1598年、秀吉が逝去。天下の趨勢は徳川家康に有利となるが、茶々は秀頼と小督の娘千を結婚させ、徳川との関係を深めることに成功する。それから十年後。ついに兵を挙げた徳川の軍は、豊臣の牙城、大坂城を包囲する。停戦を詰め寄る徳川家康の前に、徹底抗戦を宣言した鎧武者姿の秀頼と茶々が姿を表わす。風雲急を告げる大坂城の中で、悲壮な死を遂げた。

作品のクライマックスは最後のところにある。「茶々眼をつぶった。父浅井長政が、母お市の方が、義父勝家が、伯父信長が、みんなそうしたように、彼女も亦白い刃先に眼を落としたまま、自分の前の短刀を獲る時刻の来るのを待っていた。矢倉の窓からは、初夏の陽と青い空が見え、それ以外の何物も見えなかった。城を焼く余燼の煙が、時々、その青い空を水脈のように横に流れていた」。茶々は人心を震撼させるほど、想像を絶する雄大な場面で、悲壮な最期を遂げた。その炎に包まれた天守に佇む、凜として美しい姿は読者の心を強く打つ。

このように、織田信長の血を受け継ぎ、豊臣秀吉に愛され、徳川家康と天下を賭けて戦った茶々は男たちの激しい覇権争いの中で、権力のトップに上り詰め、実権を握った女性だった。いかにも特殊な女性の存在で、輝かしい光に満ちている。その名は時代に君臨した後として歴史に刻まれる。「これほど史的記述が少ないのに、茶々ほどその生涯が判っているように思われる女性は少ない。三つの落城の焰の火照りが余りにも烈しいので、暗闇に包まれている部分も、その火照りのために、私たちの目の前に浮かび上がって来るか

らである。彼女が生きた時代をそのまま記して行くと、否応なしに彼女がそれに対して生きた姿勢が描かれてしまうのである。それほど茶々は歴史のまっただ中に置かれ、そこを歩かされているのである。希有な運命の持主と言うほかはない。」と井上氏は述べる。²⁾

作者は小説の中で、自らの運命を受け入れ、屈することなく波乱の戦国時代を駆け抜けた主人公茶々を、強く生きる女性像として質高く描いた。作品に登場する茶々は、巷間に伝えられる「女帝」「権力を振舞う女」というネガティブな姿ではなく、数奇な運命の中、妹たちを守り、秀吉への微妙な愛情と、自らの誇りを貫いた女性として描かれる。まさに戦国武将たちが作ってきた勝者たちの歴史では語られない、自分の人生を生ききった女性物語である。井上氏はその数奇な運命にも屈せず、命を賭けて子供を育み、尋常ならぬ愛と恨みを胸に秘めながら、自分の運命に自覚しながら自ら受け入れていく激動の生涯を、壮大なスケールで豪華に、艶やかに魅せるほど描いた。その描写は古代女性に現代的な要素を入れて、現在では理想とされる女性像になった。そのかわいい、きれいという表面的なものから、格好よく生きるという女性意識が強く感じ取る。

三

『楊貴妃伝』は中国史上有名な美女、楊貴妃の運命をドラマチックに描いた名作である。玄宗皇帝と愛妃楊貴妃の愛は「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」と百楽天の傑作「長恨歌」に美しく謳い上げられたことがあるが、井上靖氏はその物語を現代的角度からもう一度解釈し、天下の寵愛をこの身に集め、莫大な権力さえも手中にした女性主人公とその波瀾に満ちた短い生涯をを絢爛な絵巻のごとく流麗に描き出す。まさに唐代の豪華壮大な叙事詩のような、熱く胸を打つ傑作長編小説である。

まずはそのあらすじについて簡単に説明しておく。西暦740年、中国は盛唐の時代で、皇帝玄宗の世であった。玄宗皇帝が28歳で即位してから、「食物は満ち溢れ、治安はよく保たれ、民は生業に安んじ、民心は安定し、天災地異もなく、人情風俗ともに誠を失うことなくして篤い太平の時代であったのである」³⁾と井上靖は書いている。その玄宗は息子の妃であった楊玉環を自分の妾として召す。小説は楊玉環が皇帝の後宮に入ったところから物語が始まる。著者は主人公楊貴妃を極普通の女性としての心理に注目し、それが権力の魅力にとり憑かれ、身を滅ぼしていくまでの心の変化を追いかけている。

最初に玉環がそれまで思っても見なかった新しい運命の中に否応なしにおかれたときは、その運命の持つ本当の意味には気付いてなかった。自分が今幸福に向かって歩いているのか、反対に不幸に向かって歩いているのかまったく判らなかったが、それを受け入れるしかない。「判っていることはただ自分が容易ならぬものの方に招き寄せられつつあるということであった。そこへ近づいていくことがそうしなければならぬことが、自分にやって来た新しい運命であった。何人も比肩することのできぬ大きな権力を持ち、その一言で何人の命をも断つことのできる殆ど信じられぬような人物が、そこで、いま自分を待っているのである。」

こんな運命には玉環は憧れよりはむしろ大きな不安を抱いていた。「玉環はその前に伺候して行く自分が不安だった。玉環はこの地上で最大の権力を持つ一人の人物を、人間としてより、自分に覆いかぶさって来る運命のようなものとして受け取っていた。その運命と、今や玉環は出遭おうとしていた。そうしたことに根差している不安であるに違いなかった。」この時の玉環の苦しい心中がはっきり察せられるが、やがて玉環は自ら自分に襲ってきた運命を認め、且つその中で自分の人生を自分らしく生きる強い意志を見せた。

その中では、楊貴妃が女性としては権力への憧れや、闘争に敗れるかも知れないという不安、同性同士の嫉妬の感情に負けてしまい、保身をしたいという不安から逃れるために、より強大な権力を求め、身内を宮廷に入れて自分をなんとか守ろうとした。そんな彼女は妃として精神的に玄宗から独立し徐々に独自の権力を確立していく。それと共に楊氏一族が要職に取り立てられる。

しかし、そんな生活も長く続かず、一族から出た宰相の失政から地方長官の安祿山が反旗を翻し、その咎を受ける形で楊貴妃も腹心の宦官に縊り殺される。作者は作品の最後に、楊貴妃の悲劇的な最期を、「安祿山が叛したお陰で、武后にも、韋氏にも、太平公主にもなることなく、国に殉ずる形でその三十八年の生涯を終えることができたのである」と安堵で締めくくる。武后も、韋氏も、太平公主も、一時的に天下の権を握った女性たちだ。楊貴妃が玄宗に召されたのは、彼女が22歳のときだった。そして最期を迎えるまでの16年間、一人の美しい女性でしかなかった彼女が、権力者を手の平で転がしはじめ、道具として利用するほどの力を持つようになる。結果として、そこに、楊貴妃という人物像に「華にも意地あり」という女性の強さがはっきり現れる。

作中の玄宗皇帝は楊貴妃と対照的な人物だった。玄宗は中国唐王朝6代目の皇帝で、若いころは政治に取り組み、庶民の生活向上のために知恵を絞り、優れた治世を作りだした名君だった。が、晩年、政治に飽きて、楊貴妃を寵愛し、それにのめりこんで、周囲が見えなくなり、楊貴妃と二人きりの世界に逃げ込んだ。楊貴妃との愛に溺れるにつれて、しだいに執務を怠り、安祿山の野望を見抜けことができず、人心も離れていく。楊貴妃と、彼女を利用して政治を操る裏幕たちと、彼らにとって玄宗皇帝は「己が運命を切り拓くための獲物に他ならなかった」と井上靖氏は書く。そんな玄宗はある意味では悲しい人物だと言えよう。彼が政治に飽きてしまった心理、女性にのめりこむ以外に生きることを確かめることができなかった心理は生き生きと描かれ、より実感を伴って、伝わってくる。不安にとらわれていると、際限なく不安から逃れる作業に駆り立て続けられてしまわざるを得ない玄宗は国家の最高権力者というよりは精神的な苦しみにかけられ、ちっぽけな生き物しかない。それを描写する場面も実に人間的で、興味深いと思う。

それに対して、主人公楊貴妃の人間像は一段と鮮明で、印象的である。楊貴妃を巡る歴史は彼女が玄宗皇帝を誑かして帝国を傾けたことが「定説」となっている。しかし、井上靖は楊貴妃のダークサイドを描かず、ひたすら玄宗皇帝との関係からその運命の変化を追っていく。作中では、主人公楊貴妃の内心世界における愛の葛藤、運命への不安、権力への執着、不安から逃れるための際限ない闘争がじっくり描かれている。作者はこの名編において、玄宗皇帝の寵愛を受け、後宮の最上位を占めた後、皇帝の妃となった楊貴妃の運命的な短い生涯を、唐代の史実の中に掘り起こしながら、女の愛の不思議さと、権力者の非情な心のからみあう人間ドラマを、絵巻物のように浮かび上らせ、色あせない壮大な叙事詩として構築した。読み手は、共感したり、涙が誘われたりして、作品に入っていく。作家は自分の人間観から、「定説」となっている楊貴妃像を、百楽天の長恨歌に「比翼連理の誓い」と表されている玄宗皇帝と楊貴妃の愛を謳い上げる絢爛な物語を、彼なりに解釈し、成功したと言えよう。

四

小説「淀どの日記」と「楊貴妃伝」は井上靖の歴史小説の代表作である。その主人公である茶々と楊貴妃は井上靖の歴史小説における女性像の殆どすべての特徴を併せ持っている。性格から言えば、二人とも感受性の強い女性である。自分に襲ってきた運命にはっ

きり意識し、それを受け止めようと努力する。それと共に、思いやりも、細かい心遣いも、感情の陰翳も直接に表情動作に現れず、心の内側にしまっておけ、それだけの忍耐と余裕を持つことのできる女性であり、自分の意志を、簡単に相手に覗かせようとしていない女性である。また、性格にはもろさと固さを、相反したものを併せ持っていて、あらゆる人の感情を彼女独特の感じ方で感じ取る女性である。男の世界では、女性らしい脆さに苦しめられながらも、人間として自覚に目覚め、自分なりの考え方を貫き通して生きていき、その悲劇的な最後は人の心をつまみ、涙を誘ったのである。

井上靖氏は歴史上の女性運命と悲劇性との関連について嘗てこう述べたことがある。「戦国時代という時代の持つ厳しさのために、不幸の烙印を捺された女性に数え切れぬくらいたくさんある。」「戦国時代の悲劇的な女性の大部分が抗し難い運命の波に押し流され、暗い陰惨な印象を残している女性ばかりである。」⁴⁾ また、作品『楊貴妃伝』においても当時の貴族女性が辺境異民族慰撫のために辺鄙なところへ嫁がれることに言及している。「辺境異民族の慰撫に成功した場合でも、彼女等の運命は大きい悲劇と言うほかはなかったのである。大唐帝国に生を享けて、しかも上流階級の女として深窓に育ちながら、政略結婚の犠牲となって、未開の遊牧民族のもとに嫁いで行くのである。」

たしかに、氏の言うとおりの、乱世の歴史に散らばっている女性たちの人生と言え、いかにも、その不幸な暗いものが感じさせられる。乱世時代を生きた女性はいずれにせよ、みな容易ならぬ人生を送ったという一語に尽きよう。時代争乱の大きい波濤に揺られながら、彼女たちは木の葉が波間に漂うように漂い生きたのである。「史上に現れている戦国時代の女性はそのほとんどすべての悲劇の主人公である。文字通り天下が麻のように乱れた争乱の世には、女性にとって安穩の生活はなかったのである。ほとんどすべての女性が政争の具になり、幼いうちから人質にされたり、政略結婚を強いられたりしている。しかし、ごくまれな例ではあるが、人間として自覚に目覚め、自分の生き方を貫いた女性もある。」⁵⁾

茶々と楊貴妃はまさにその典型である。波乱万丈な人生において、尋常ならぬ運命のいたずらに翻弄され、自ら不幸を乗り越えようと一生懸命に生きていく。二人の中で、自分の運命を明確に意識し、認めながらも、「どんなことがあっても精一杯生きていく」という強い生存意志とすさまじい迫力が極めて鮮明な印象を残し、人の心を打つ。例えば、楊貴妃の場合は初めのころ、どんな運命が自分を待っているか、不安が深まる一方であった。しかし、まもなく、自分の運命の真意に意識し、それを素直に受け止め、且つ愛していくように決めた。「玉環はいま自分の前に居るものを愛そうと思った。愛そう思うのではなく、この時、玉環は既に愛していたのであった。この世のいかなるものよりも、玉環は愛しいのであった。それは力であり、天であり、玉環自身の運命であった。」また、茶々も作品の中で、「わたくし、こうなる運命を持って生まれた来た女だと思います。つい先刻まで、わたくしは自刃して果てようと考えて居りました。併し、いまは違います。生きようと考えております。父も、母も、祖父も、それから義父勝家も、最後のぎりぎりまで、お城の天守が燃え落ちてしまうまで生きておりました。私もそういたします。もうこれ以上生きることができないという時になるまで生きてみようと思います。」と強く自分の意志を表明した。その素直で、凄まじく生きる姿がこの上なく美しく見え、読み手に感動を与える。

女性の美しさというものは「多少異常なものと哀れっぽいものを同時併せ持ったもの」と井上氏は語ったことがある。⁶⁾ 作中の茶々と楊貴妃はこの二つの要素を同時に身につける上に、どちらも希有な運命と悲劇性に富んでいる人生の持主である。楊貴妃はもともと玄宗の息子の妃であり、茶々は複雑な事情を負い、両親を死に追いやった憎い仇なる秀吉

の側室になった。一方、二人とも華やかな人生を強い生存意志で自分らしく送り、しかも悲壮な最期を遂げたのである。簡潔に言えば、悲劇性から脱出し、強さにつながる自分らしさが二人の女性人物の共通点で、且つ特徴ではないかと思う。この点をずばりと見抜いた上で、女性の心理を繊細に把握し、見事に描けることが、氏が文章家としての腕前の見せ所だと言えよう。

そこで、二人とも悲劇の主人公とは言うが、どこかに他の女性たちより強いものが感じられる。同じように抗し難い運命の波に押し流されているとは言え、茶々と楊貴妃の場合は暗い、陰惨な印象はない。哀れではあるが、どこか凜乎としたものが感じられる。むしろ乱世の中で、自ら進んで運命を受けとめて生きていくというイメージが極めて強い。美貌と聡明で有名であったとともに、彼女らは自分で自分の生きる道を求め、それを貫き通すといった性格の強さがあった。作家は茶々と楊貴妃という二人の女性を通して戦乱時代の厳しさ、非情さを端的に表した同時に、二人の類まれなる人生の生き方を見事に描き出した。作品に描かれた燦然と異彩を放つ女の生涯は豪華絢爛な絵巻のように魅力に満ちていて、その壮絶な運命は読者の心を打つ。

注釈

¹⁾ この論文における小説「淀どの日記」からの引用はすべて、『井上靖全集』（第10巻、新潮社、1996年）による

²⁾ 井上靖「茶々のこと」、『井上靖全集』（第25巻）、1997年、661頁

³⁾ この論文における小説「楊貴妃伝」からの引用はすべて、『井上靖全集』（第15巻、新潮社、1996年）による

⁴⁾ 井上靖「戦国時代の女性」、『井上靖全集』（第25巻）、1997年、645頁

⁵⁾ 井上靖「戦国時代の女性」、『井上靖全集』（第25巻）、1997年、648頁

⁶⁾ 井上靖「女の人の美しさ」、『井上靖全集』（第26巻）、1997年、684頁

参考文献

- 『井上靖全集』（全28巻・別巻1） 新潮社 1995年—2001年
 曾根博義編集 『井上靖』（新潮日本文学アルバム・48） 新潮社 1993年
 長谷川泉編 『井上靖研究』 南窓社 1974年
 福田宏年著 『井上靖の世界』 講談社 1972年
 高橋英夫[ほか]著 『井上靖』 小学館 1991年

（平成20年3月31日受理）